ロシア語訳『源氏物語』研究

——「もののあはれ」の観点から——

土田 久美子

(青山学院大学大学院国際コミュニケーション専攻博士後期課程)

A Study of the Russian Translation of *The Tale of Genji*: An Analysis in Terms of the Aesthetic Concept *mono no aware*

TSUCHIDA, Kumiko

Aoyama Gakuin University, postgraduate student

Abstract

The aim of this paper is to analyze the Russian translation of Murasaki Shikibu's *The Tale of Genji*, focusing on *mono no aware*. *Mono no aware* has been regarded as the key concept of this literary classic, ever since it was first proposed by Motoori Norinaga.

N.I. Konrad's Russian translation of the third chapter (*Utsusemi*) was done in 1924, prior to the English translation by Arthur Waley. However, thereafter Konrad translated only the first, second, and fourth chapters. The complete Russian translation was carried out by T.L. Sokolova-Deliusina, and was published in 1991–1993. It is this complete translation that forms the principal basis for our study.

According to Norinaga, *aware* is originally an exclamation, and as a noun and an adjective verb, it expresses deep, heartfelt emotion, including not only sorrow but also joy and amusement. Moreover, *mono no aware* is the emotion of *aware* that is aroused when one intuitively feels "the heart of *mono* — things". Ohnishi Yoshinori defined *aware* as the aesthetic category that was formed under the influence of thoughts about the evanescence of life. Ivan Morris noted, "*Aware* is one of the many untranslatable words that are used to define Japanese aesthetics". *Mono no aware* is known in English as "the pathos of things" (translated by Ivan Morris), or as "pity of things" (translated by Royall Tyler).

With regard to Russian translations of the story, Konrad, in his paper titled *Murasaki Shikibu's novel*, translated *mono no aware* as "chary veshchei" (lure of things). He further explained that it was the Japanese aesthetic principle of the need to comprehend the "ocharovanie" (charm) that is inherent in various things. In the preface of the complete Russian translation of *Genji*, Sokolova-Deliusina translated the concept as "pechal'noe ocharovanie veshchei" (sorrowful charm of things), and

Keywords: translation into Russian, *The Tale of Genji*, Murasaki Shikibu, *mono no aware*

wrote that it connected the attractive beauty of the material world with thoughts about its transience and fragility.

It is commonly understood by both the Russian and English translators that *mono no aware* comprises elements of sadness, sorrow, and thoughts on evanescence. However, it could be said that Russian translators regard this concept as involving the element of “charm”.

This was supplemented by Sokolova-Deliusina in her explanation that by sensing *aware*, the essence of things can be comprehended. Therefore, *mono no aware* is aspiration of the soul to attain the eternal sources of things, and its desire to capture their elusive meaning.

For certain sections of the story, Sokolova-Deliusina translated *aware* or *mono no aware* as “sorrowful charm”, and “to comprehend the heart of things, their secret meanings”, all based on her above explanation of this concept. It is also worth taking into account that for the very same sections, none of the English translators of *The Tale of Genji* interpreted *aware* or *mono no aware* in the same manner as that of Sokolova-Deliusina.

A book review of Sokolova-Deliusina’s Russian translation of *The Tale of Genji* describes it as “unique in aesthetic value”. As we have examined, due to her profound understanding of *mono no aware*, such an evaluation is well deserved.

は じ め に

『源氏物語』の最初の外国語訳は1882年に出版された末松謙澄による英訳（絵合巻まで）であるが、外国人による翻訳としては、1925～33年刊のアーサー・ウェイリーの英訳より早い1924年に、東洋学者ニコライ・ヨシフォヴィチ・コンラドが空蟬巻のロシア語訳を発表していた。だが惜しいことにコンラド訳は1925年の夕顔巻、1927年の「雨夜に」（帚木巻の雨夜の品定め）に相当）、1935年の桐壺巻にとどまった。完訳は、日本文学翻訳家タチアーナ・リョヴォーナ・ソコロワ＝デリュエシナ氏によって、1991年～93年に出版された。

デリュエシナ訳に関する先行研究には、原文と翻訳の余儀ない乖離の問題点を取り上げた田村充正氏の論文（1999）がある。一方、筆者はロシア人翻訳者の『源氏物語』理解がどのように翻訳文に反映しているのか、という問題意識を有しており、〈語り〉と和歌について拙稿（2004）がある。本稿では、本居宣長（1969）が「げにさもあらんと、あはれを見せるといへる、これ源氏物語のまなこ也、此物がたりは、しか物のあはれをしらしむることを、むねとかきたるもの也」⁽¹⁾と宣言して以来、『源氏物語』の重要な理念と見なされてきた「もののあはれ」に焦点を当てる。アイヴァン・モリス（1964）は『源氏物語』の研究書『光源氏の世界』で、「あはれ」は日本人の美意識を定義するために用いられる、翻訳不可能な単語の一つだと指摘している⁽²⁾。本稿でも完訳を中心に考察するが、デリュエシナ氏は「もののあはれ」という言葉をどのように理解して、『源氏物語』の翻訳でどのようなロシア語に訳したのだろうか。

⁽¹⁾ 本居宣長、「源氏物語玉の小櫛」（1799年）、1969年所収、p. 187。

⁽²⁾ Morris, 1964, p. 207. 斎藤和明訳、1969年、p. 240。

1 「もののあはれ」の語義

『源氏物語』における「もののあはれ」の問題を考察する際には、例えば大野晋編著（2001）の論考のように、主として「あはれ」、「ものあはれ」、「もののあはれ」の三語が対象になる。最初に、これらの語義を確認しよう。『角川古語大辞典』（1982, 1999）によれば、まず「あはれ」は喜怒哀楽によって生ずる深い感動を表す感動詞であり、名詞・形容動詞の「あはれ」は愛情・同感・感慨・賞嘆・悲哀などの感情を詠嘆的に表す語である⁽³⁾。形容動詞「ものあはれ」は、「物事のさまが全体的に心にしみて、深くしみじみとした感興を覚えるさま。なにとなくかなしいさま」⁽⁴⁾と定義される。そして名詞「もののあはれ」は、「外界の物事・ありさまを見聞きすることによって引き起こされる、深い喜怒哀楽の感情。……特に、外界の物事に触発されて生ずる、深い静かな哀憐・悲哀などの感情。……対象との深い合一感・一体感によって生ずる悲哀感を主としている」⁽⁵⁾と説明されている。

前述の本居宣長（1969）は、「何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきころをしりて、感ずるを、もののあはれをしろとはいふ」⁽⁶⁾と述べた上で、『源氏物語』は作者が春夏秋冬や恋など、世の中の様々な事の本質に触れて感じた「もののあはれ」を、読者にも深く感じさせるために書かれたと主張した。そして、この物語を仏教・儒教的訓戒や好色の戒めとする従来の読み方を斥けた。和辻哲郎（1962）は、宣長が文芸の自律性を提唱したことを評価し、その根拠について考察を進めた一方、「もののあはれ」を「永遠への思慕に色づけられたる官能享楽主義」、「涙にひたれる唯美主義」、「世界苦を絶えず顧慮する快楽主義」⁽⁷⁾といった平安朝の精神として位置づけた。また美学者の大西克禮（1939）は「あはれ」を、季節の変化に対する感覚と平安朝人の非活動的な生活気分とが結合して人生の無常感が刺激され、さらに優美や艶美などの美的契機と統一することによって成立した美的内容⁽⁸⁾をもつ日本的な美的範疇とした。

2 「もののあはれ」という理念のロシア語訳

こうした複雑な意味を有する「もののあはれ」は、どのようなロシア語に訳されたのだろうか。まずコンラド（1927）は、前述の「雨夜に」のロシア語訳と共に収録された論文「紫式部の長編小説」で「もののあはれ」を「*чары вещей*（ものの妙趣）」と訳した。それは、あらゆる事物に含まれていて常に巧みな手法によって呼び起こされうる魅力（*очарование*）の意味に精通する必要がある、という日本の美学の独得な原則であり、紫式部は平安時代の状況に触

⁽³⁾ 『角川古語大辞典』第一巻、1982年、p. 109。

⁽⁴⁾ 『角川古語大辞典』第五巻、1999年、p. 667。ただし大野晋氏は、「もの」が「何となく」と解されてきたのを批判し、「もの」には運命や、人間には動かしがたい成り行き、という意味があると説明している（大野晋、2001年、pp. 173-178）。

⁽⁵⁾ 同書、pp. 672-673。

⁽⁶⁾ 本居宣長、「源氏物語玉の小櫛」（1799年）、1969年所収、p. 203。

⁽⁷⁾ 和辻哲郎、「もののあはれについて」（1922年）、1962年所収、p. 152。ただし和辻は「もののあはれ」及び平安朝文芸に男性的なるものが欠乏している点に不満を抱いていた（同書 pp. 154-155）。

⁽⁸⁾ 大西克禮、1939年、p. 219 及び p. 225 参照。

れて、読者にあらゆるその魅力（очарование）を見せた⁽⁹⁾、とコンラドは説明していた。

デリュージナ（1991）氏は、自らのロシア語訳『源氏物語』の序文で「もののあはれ」を「*печальное очарование вещей*（ものの悲しい魅力）」と訳しており、「誘惑する物の世界の美という主題とその物の世界の不安定性、非永続性についての思想を結び付けている」⁽¹⁰⁾ 概念だと述べている。それは、ヴェーラ・ニコラエヴナ・マルコワ（1962）が「平安朝人は『*печальное очарование вещей*』について語るのを好んだ、これは地上の存在の非恒常性に関する仏教の教えに適っており、同時に、今に消えてしまわねばならぬものの美をより強く感じさせていた」⁽¹¹⁾ と書いていたのを参考にしたという⁽¹²⁾。なおマルコワはコンラドに学んだ日本文学翻訳家であり、引用文は『竹取物語』と『落窪物語』のロシア語訳を取めた本の序文中の言葉である。

三者とも出典を示していないが、まずコンラドの説明は、「世にあらゆる事にみなそれ／＼の物の哀はある」⁽¹³⁾ ので「何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきことをしりて、感ずる」（既出、注（6））のが「もののあはれ」をすることであり、『源氏物語』は「殊に人の感ずべきことのかぎりを、さま／＼かきあらはして、あはれを見せたるもの」⁽¹⁴⁾ である、という本居宣長（1969）の見解を受けていると考えられる。一方、マルコワ及びデリュージナ氏は、大西克禮が定めたような日本的な美的範疇としての面を紹介している。それでも、「もののあはれ」を説明するのに「очарование（魅力）」という語を用いているのは、三者に共通している。

他の外国語翻訳者が「もののあはれ」を訳す場合も、同様に「ものの悲しい魅力」となるのであろうか。デリュージナ（1996）氏は、推敲の際ウェイリー訳や1976年に刊行されたサイデンステッカー訳を参照したそうだが⁽¹⁵⁾、両英訳者とも『源氏物語』の序文では「もののあはれ」に言及していなかった。ただ、サイデンステッカー著『源氏日記』（1977）では「もののあはれ」に「*Pathos, lacrimae rerum*」⁽¹⁶⁾ という注がある。これは、モリス（1964）が『光源氏の世界』で「もののあはれ」を「*the pathos of things*（事物の哀感）」と訳し、さらにラテン語の「*lacrimae rerum*」にもほぼ相当する⁽¹⁷⁾ と述べていたためであろう。後者の出典は、ウェルギリウス作『アエネイス』である。柳沼重剛（2003）氏によれば、アエネアスはカルタゴでトロイア戦争の絵を見て「ここにも人の世に注ぐ涙（*lacrimae rerum*）があり、人間の苦しみは人の心を打つ」と言った。この言葉は、憂愁を含んだ美しさで人を引きつけるので有名になったと言われている⁽¹⁸⁾。その上でモリス（1964）は、「もののあはれ」を身に沁みて感得するときとは、この世の美しさと哀しさとのつながりを感じ取る瞬間であり、美に接して、この世に生きる人間として自らのはかなさをひとしお強く思い意識させられる時である⁽¹⁹⁾、と説

⁽⁹⁾ Под ред. Конрада, 1927, стр. 221.

⁽¹⁰⁾ Пер. Соколовой-Делюсиной, 1991, Кн. 1, стр. 4.

⁽¹¹⁾ Пер. Марковой, 1962, стр. 10–11.

⁽¹²⁾ デリュージナ氏より筆者宛の私信（2005年2月27日付）でのご教示による。

⁽¹³⁾ 本居宣長、「紫文要領」（1763年）、1969年所収、p. 57.

⁽¹⁴⁾ 本居宣長、「源氏物語玉の小櫛」（1799年）、1969年所収、p. 203.

⁽¹⁵⁾ ソコロワ＝デリュージナ、法木綾子訳、1996年、p. 18.

⁽¹⁶⁾ Seidensticker, 1977, p. 103.

⁽¹⁷⁾ Morris, 1964, p. 208. 斎藤和明訳、1969年、p. 241.

⁽¹⁸⁾ 柳沼重剛編、2003年、p. 148。「*lacrimae rerum*」の出典及び意味は杏掛良彦先生（東京外国語大学名誉教授）にご教示いただいた。直訳は「事物の（=*rerum*）涙（=*lacrimae*）」であるという。

⁽¹⁹⁾ 注（17）に同じ。

明している。

なお、デリュシーナ訳の後に出版されたロイヤー氏の英訳（2001）では、本文の脚注において、「もののあはれ」は無常の思想（thoughts of evanescence）と結びついた「pity of things（事物の哀憐）」である⁽²⁰⁾、と述べられていた。

以上より、「もののあはれ」が「печальное」、つまり悲哀の要素を有することや、無常の思想と結びついた美しさであることは、他の翻訳者、研究者とも共通している。一方、「очарование（魅力）」としてとらえる点は、ロシア語訳の特徴ではないかと考えられる。

ロシアの類義語辞典（2001）によると、「очарование」は「誰か、何かから生ずる、惹きつける、魅了する力」であり、コンラドが用いていた「чары」はさらに強い意味で「誰か、何かの極めて強く魅了する力、美の威力、興味を起こさせるもの」⁽²¹⁾である。また、ロシア語の辞書（1959, 1965）によると、両者にはそもそも魔法、魔力という意味があった⁽²²⁾。本居宣長（1969）は「あはれ」を説明するにあたり古今集のかな序から「おに神をもあはれと思はせ」⁽²³⁾という一節を引用しており、国文学者の西下経一（1950）は「もののあはれ」について「全身をひたし、全身を支配するような深い感動の経験」⁽²⁴⁾と述べていた。従ってロシア語の「чары, очарование」という訳語は、「もののあはれ」の絶対的な、全身を支配するような力のある感動、美しさ、という面をとらえている。

さらに、デリュシーナ（1992）氏はロシア語訳『源氏物語』の別巻に収められた『『源氏物語』、時代、作者』という解説文で、「もののあはれ」について以下のようにも説明している。

『アワレ』によって、『モノ』の本質が理解される。『モノ』とは、外形（облик）のない『もの』（事物あるいは現象）であり、ものの個々の発露を超えたもの、ものの本質である。『モノーノ アワレ』とは、ものの永遠の源に対する（к вечным истокам вещей）心の希求、それらのすべり抜けてしまう意味（их ускользающий смысл）を捉えたいという願望である。⁽²⁵⁾

最初の文は、注（6）で引用した宣長の「感ずべきころをしりて、感ずる」のが「もののあはれ」をすることである、という言葉に該当しよう。その次は、和辻哲郎（1962）の論に通じていると見受けられる。すなわち、「もの」は意味と物のすべてを含んだ一般的な、限定せられざる「もの」であり、「もののあはれ」とは「もの」が限定された個々のものに現れるとともにその本来の限定せられざる「もの」に帰り行かんとする、永遠の根源への思慕である。文芸はこれを具体的な姿において高められた程度に表現するものであり、それによって我々は過ぎ行くものの中に過ぎ行くものを通じて、過ぎ行かざる永遠のものの光に接するのである⁽²⁶⁾。

よってデリュシーナ氏は、日本的な美的範疇としてだけでなく、宣長や和辻が述べたような、文芸の自律性の根拠になる「もののあはれ」の面も把握していたと言える。

⁽²⁰⁾ Trans. by Tyler, 2001, p. 817.

⁽²¹⁾ Под ред. Евгеньева, 2001, Т.2, стр. 2.

⁽²²⁾ «очарование» — Институт русского языка, 1959, Т.8, стр. 1788. «чары» — 1965, Т.17, стр. 762.

⁽²³⁾ 本居宣長, 「源氏物語玉の小櫛」（1799年）, 1969年所収, p. 202.

⁽²⁴⁾ 西下経一, 1950年, p. 122.

⁽²⁵⁾ Пер. Соколовой-Делюсиной, Приложение, 1992, стр. 47.

⁽²⁶⁾ 和辻哲郎, 「もののあはれについて」（1922年）, 1962年所収, pp. 150-151 参照。強調は原文。

3 物語本文における翻訳例の検討

実際のロシア語訳『源氏物語』本文中においては、「あはれ」、「もののあはれ」、「もののあはれ」が全て「печальное очарование вещей」と訳されたわけではない。鈴木日出男（2003）氏が述べるように、宣長の提唱した「もののあはれ」の理念は、単純に『源氏物語』の用語例から帰納されたものではなく、この物語を理解するために導入された創造的な術語だからであろう⁽²⁷⁾。しかし、上記のデリュエシナ氏の「もののあはれ」についての見解が『源氏物語』の翻訳に反映されている場面がある。以下、それがどのように反映されているのかを検討したい。

まず例示するのは、源氏が末摘花の邸に泊まった翌朝、彼女の赤い鼻を見て驚愕し、急いでこの荒れ果てた邸宅を後にする場面である。（以下、下線は筆者による）

原文 御車寄せたる中門の、いといたる、ゆがみよろぼひて、夜目にこそ、しるきながらも、萬かくろへたる事多かりけれ、いと、あはれに淋しく荒れまどへるに、松の雪のみ、あたゝ（か）げに降り積める、山里の心地して物あはれなるを、（後略。末摘花巻）⁽²⁸⁾

デリュエシナ訳 Срединные ворота, к которым подают его карету, совсем обветшали и скособоились. Ночью многочисленные изъязны не были так заметны, хотя догадаться об их существовании не составляло труда. Теперь же перед Гэндзи открывается картина такого унылого запустения, что сердце его мучительно сжимается. Только снег, пухлыми шапками покрывающий ветви сосен, кажется теплым и придает саду то печальное очарование, какое бывает у уединенной горной усадьбы.⁽²⁹⁾（以下拙訳：彼の車が寄せてある中門はすっかり老朽化し、傾いていた。数多くの欠陥があることは容易に想像できたが、夜はさほど目立たなかった。今や源氏の前にはとても陰気で荒廃した光景が開かれて、彼の心は苦しく締めつけられる。ただ、ふかふかした綿帽子のように松の枝をおおう雪だけが暖かそうで、人里離れた山荘で見られるような悲しい魅力を庭に添えている。）

岩波書店『日本古典文学大系 源氏物語』（1958、以下「岩波大系」）の頭注では下線部はそのまま「物あわれであるのに対して（を）」⁽³⁰⁾とされている。英訳では、末松訳は該当箇所が省略されており、ウェイリー訳（1965）では「sombre as a little village in the hills」⁽³¹⁾、サイデンステッカー訳（1977）では「It was a lonely, desolate sight that spread before him, like a village deep in the mountains」⁽³²⁾、タイラー訳（2001）は「the house felt remarkably like a mountain village」⁽³³⁾である。だがこの場面では、熊谷義隆（1989）氏によれば荒廃した末摘花邸の侘し

(27) 鈴木日出男、2003年、p. 810。

(28) デリュエシナ訳及びサイデンステッカー訳の底本『日本古典文学大系 源氏物語』（1958年）より引用する。第一巻 p. 258。以下引用の際、やむを得ず旧字体の漢字を新字体に改めたところがある。「あたゝ（か）げに」の括弧内は校注者による、三条西実隆筆・青表紙証本の本文への補足である。なお紙幅の都合で引用できないが、「いと、あはれに淋しく」の「あはれに」はデリュエシナ訳では「сердце его мучительно сжимается（彼の心は苦しく締めつけられる）」となっているが、英訳ではいずれも荒廃した状況が述べられるのみで、訳出されていない。

(29) Пер. Соколовой-Делюсиной, 1991, Кн. 1, стр. 125.

(30) 注（28）に同じ。

(31) Trans. by Waley, 1965, p. 122.

(32) Trans. by Seidensticker, 1977, p. 125.

(33) Trans. by Tyler, 2001, p. 125.

さ・寂しさが松の雪によって美的情趣に転化され、風景が二重化されている⁽³⁴⁾。デリュシーナ訳では、ちょうどここで「печальное очарование」という訳語が用いられていたのである。

次は、病気がちの紫の上が死期を悟り、法華経の供養を行った場面である。桜の花が霞の間から見え、千鳥のさえずりも聞こえる中、「陵王」という舞楽が終わりにさしかかった。

原文 陵王の舞ひて、急になる程の、末つかたの樂、はなやかに、にぎはしく聞ゆるに、皆人の脱ぎかけたるものゝ色々なども、物の折からに、をかしうのみ見ゆ。……上・下、心ちよげに、興ある氣色どもなるを、見給ふにも、「のこり少なし」と、身を思したる御心のうちには、よろづのこと、あはれにおぼえ給ふ。(御法卷)⁽³⁵⁾

デリュシーナ訳 Но вот начался танец «Князь Лин-ван», и, когда танцор под громкие звуки музыки делал заключительные па, гости сбросили яркие верхние платья, чтобы поднести ему. Восхитительное зрелище! …… И высшие и низшие предавались безудержному веселью. Нетрудно себе представить, сколько печали и сколько очарования таил этот миг для госпожи, знавшей, как близок ее конец.⁽³⁶⁾ (だがそこへ「陵王公」の舞が始まり、そして、大きな音楽の音に合わせて舞人が最後のステップを踏んだ時、彼に授けるべく客人たちは鮮やかな上衣を投げてやった。見事な光景である！ ……身分の高い者も低い者もとめどなく興にふけていた。最期がいかに間近であるかを知っている夫人にとって、この瞬間がどれほどの悲しみと魅力をはらんでいたかは想像に難くない。)

下線部について岩波大系の頭注は「自然にしみじみと寂しく」⁽³⁷⁾としている。ウェイリー訳(1965)は「she felt there were after all many things that it was sad to lose」⁽³⁸⁾、サイデンステッカー訳(1977)は「Murasaki thought how little time she had left」⁽³⁹⁾、タイラー訳(2001)は「It stirred many feelings in her」⁽⁴⁰⁾である。「悲しい」という言葉はウェイリー訳でも使われていたが、デリュシーナ訳のような「魅力」という訳語は見当たらない。だが大西克禮(1939)は、本引用場面が、美的範疇語としての「あはれ」の充実完成した段階に近い美を表現していると述べている⁽⁴¹⁾。確かに、桜が咲き匂う中で人々が舞に興じている華やかな情景を、命の無常を感じる紫の上が見守るという、悲しくも美しい場面である。デリュシーナ氏は、こうした「あはれ」に「печаль」だけでなく「очарование」の意味もあると読み取ったのである。

一方、次に引用するのは、雨夜の品定めで、左馬頭がいかなる女性を妻に選ぶべきかについて源氏たちに説いている言葉である。当箇所はコンラド訳の範囲に入るので参照しよう。

原文 ことが中に、なのめなるまじき、人の後見の方は、「物のあはれ知りすぐし、はかなきついで的情あり、をかしきに進める方、なくてもよかるべし」と見えたるに、(その反面、外見を全く気につけない、無趣味な世話女房もよくない、と続く。簀木卷)⁽⁴²⁾

コンラド訳 Самое главное для женщины – помогать мужу, быть ему поддержкой в жизни … Для этого она может и не быть особенно изощренной в эстетических чувствах; может и

⁽³⁴⁾ 熊谷義隆, 1989年, p. 92.

⁽³⁵⁾ 岩波大系, 1962年, 第四巻 p. 176.

⁽³⁶⁾ Пер. Соколовой-Делюсиной, 1993, Кн. 3, стр. 191.

⁽³⁷⁾ 注(35)に同じ。

⁽³⁸⁾ Trans. by Waley, 1965, p. 729.

⁽³⁹⁾ Trans. by Seidensticker, 1977, p. 715.

⁽⁴⁰⁾ Trans. by Tyler, 2001, p. 756.

⁽⁴¹⁾ 大西克禮, 1939年, pp. 253–254.

⁽⁴²⁾ 岩波大系, 1958年, 第一巻 pp. 63–64.

не уметь по всякому поводу выказывать свою художественную чуткость: может и не преуспевать особенно в области изящного ...⁽⁴³⁾ (女性にとって最も重要なのは夫を助け、彼の生活の支えになることである…。そのためには美的感情に特別に鋭くなくてもよい；あらゆる機会に自分の芸術的鋭敏さを見せつける能力もなくともよい：優美さの面で特別に秀でなくてもよい…。)

デリュージナ訳 Поскольку важнейшей обязанностью женщины является забота о муже, можно подумать, что ей ни к чему изысканные манеры, умение проникать в душу вещей и по любому поводу выказывать свою чувствительность.⁽⁴⁴⁾ (女性の最も重要な務めが夫の世話である以上、洗練された物腰やものの心髄を洞察する能力、あらゆる機会に自分の感受性を見せつける能力は必要がないと思ってよい。)

コンラド訳の底本『新釋源氏物語』では下線部を「美的感情があり過ぎて」⁽⁴⁵⁾と現代語訳しており、同訳はそれに応じている。岩波大系の頭注は「物の情趣を十分に理解し」⁽⁴⁶⁾である。末松訳(2001)は「too full of sentimental sweetness」⁽⁴⁷⁾、ウェイリー訳(1965)は「to be too impressionable」⁽⁴⁸⁾、サイデンステッカー訳(1977)が「too much sensibility」⁽⁴⁹⁾、タイラー訳(2001)は「being too sensitive」⁽⁵⁰⁾となっている。デリュージナ訳では、語順は違いが該当する訳語は「умение проникать в душу вещей」であろうと判断した。前述の通り、「アハレ」と感じることによって「モノ」の本質が理解される、と述べていたことがこの訳語に反映されていると考えられる。英訳と比較すると、ロシア語訳の方が哲学的、美学的に解釈されている。

また次の例は、明石から都へ帰還した源氏がお礼参りに住吉詣でを行った場面である。偶然明石の君も住吉に来たのだが、盛大な源氏の一行に圧倒され、参詣を断念せざるを得なかった。源氏は明石の君を想い、集まってくる遊女たちを見ても以下のように考えるばかりである。

原文 「いでや、をかしき事も、ものゝあはれも、人からこそあべけれ。なのめなることだに、少しあはき方に寄りぬるは、心とゞむるたよりもなきものを」とおぼすに、おのが心をやりて、よしめきあへるも、うとましく思しけり。(落標巻)⁽⁵¹⁾

デリュージナ訳 Однако Гэндзи с негодованием отвратил свой взор от этих особ, разнообразными ухищрениями старавшихся привлечь к себе его внимание. «Слишком многое в жизни определяется тем, какой человек находится рядом с тобой, — думал он. — Откроется ли тебе красота предметов или явлений, проникнешь ли ты в их сокровенный смысл — все это в значительной степени зависит от душевных качеств близкого тебе человека. Поэтому-то даже в шутку я не мог бы увлечься этими ветренными жеманницами». ⁽⁵²⁾ (しかしながら、様々な策で注意を惹こうとするこれらの女たちから、源氏は憤慨して目をそむけた。

⁽⁴³⁾ Под ред. Конрада, 1927, стр. 202.

⁽⁴⁴⁾ Пер. Соколовой-Делюсиной, 1991, Кн. 1, стр. 26.

⁽⁴⁵⁾ 紫式部作、藤井紫影、佐々醒雪、沼浪瓊音、笹川臨風校注・訳、1911年、p. 114.

⁽⁴⁶⁾ 岩波大系、1958年、第一巻 p. 64.

⁽⁴⁷⁾ Trans. by Suematsu, 2001, p. 41.

⁽⁴⁸⁾ Trans. by Waley, 1965, p. 25.

⁽⁴⁹⁾ Trans. by Seidensticker, 1977, p. 25.

⁽⁵⁰⁾ Trans. by Tyler, 2001, p. 25.

⁽⁵¹⁾ 岩波大系、1959年、第二巻 p. 122.

⁽⁵²⁾ Пер. Соколовой-Делюсиной, 1991, Кн. 1, стр. 282.

「人生には余りにも多くのことが、いかなる人物が隣にいるかによって定まるものだ」と彼は思った。「事物や現象の美が開示されるかどうか、それらの秘められた意味を洞察できるかどうか——全てこれはかなりの程度身近な人の品性にかかっている。だからこそ冗談にでも私はこれらの軽薄な気取り女たちに熱中することはできないだろう。」)

岩波大系の頭注では「物の哀（情趣）を感じる事も」⁽⁵³⁾とされている。末松訳では該当する場面が省略されており、ウェイリー訳（1965）は「One cannot enjoy beautiful scenery or works of art」⁽⁵⁴⁾、サイデンステッカー訳（1977）は「one should be moved only by adequate forces」⁽⁵⁵⁾、タイラー訳（2001）が「all delight, all true feeling spring from the quality of ones' partner」⁽⁵⁶⁾となっている。デリュージナ訳には、先に述べた、「もののあはれ」とはもののすべり抜けてしまう意味を捉えたいという願望である、という氏の見解が現れていると言えよう。そして美学辞典（1989）によると、美的観照（эстетическое созерцание）において我々の視覚（聴覚）は、事物の秘められた意味や、事物と世界との、普遍的だがもろいかもしれぬ結びつきがわずかに開示される、思いがけないアспектを探し出す、と書かれている⁽⁵⁷⁾。デリュージナ氏は、「もののあはれ」を美的観照のようなものとして理解していたのではないかと考えられる。

お わ り に

以上をまとめると、デリュージナ氏のロシア語訳では「もののあはれ」という理念は「печальное очарование вещей」と訳され、荒廃した末摘花邸や余命が短いと紫の上が思う場面の「あはれ」にも「очарование」があると解釈されていた。また、本理念は「ものの本質や意味を理解すること」であるという説明もあり、物語中にそのような訳語が見られた。これらは、氏が参照した英訳『源氏物語』とも、後のタイラー訳とも異なる翻訳であった。本ロシア語訳では、「もののあはれ」の重要な本質がとらえられていると言える。もっとも、デリュージナ氏は筆者に、「очарование」という語には魔法にかけられたようになって物そのものが見えなくなっているようなニュアンスがある、と述べていた⁽⁵⁸⁾。よって「もののあはれ」は一語だが、「печальное очарование вещей」というその訳語には、「ものの本質や意味を理解すること」という意味までは含まれない。この点が、「もののあはれ」という語の翻訳の難しさである。

本論文では「もののあはれ」に焦点を絞ったが、デリュージナ訳『源氏物語』が全体としてどのように受けとめられたのかについて、最後に触れておきたい。『Новое время（新時代）』誌の記事で同訳書を紹介したモクロウソフ（2001）氏は、『源氏物語』を「美的価値の点（по своей эстетической ценности）で比類のないもの」⁽⁵⁹⁾と呼んでいる。本稿で検討した結果、同訳書は翻訳者による「もののあはれ」の確かな理解に裏打ちされている翻訳と言えることから、こうした評価は適切であろう。さらに、この美的価値のある作品が「急速に対話のパート

⁽⁵³⁾ 注（51）に同じ。

⁽⁵⁴⁾ Trans. by Waley, 1965, pp. 298–299.

⁽⁵⁵⁾ Trans. by Seidensticker, 1977, p. 284.

⁽⁵⁶⁾ Trans. by Tyler, 2001, p. 292.

⁽⁵⁷⁾ Под общ. ред. Беляева, Новиковой, Толстых, 1989, стр. 324.

⁽⁵⁸⁾ 2001年12月9日、モスクワのデリュージナ氏のお宅での個人談。

⁽⁵⁹⁾ Мокроусов, Алексей, 2001, Алхимия слова, «Новое время」のウェブサイトより。

ナーを獲得し続けている以上は、我が国において既に多くのことが完全に正常になった（многое у нас стало уже совершенно нормальным）ということだ⁽⁶⁰⁾とも述べられている。このように、『源氏物語』の受容状況から、ロシア人の精神世界の一面をうかがうことができる。ロシアにおける日本文学の翻訳、受容という観点も、ロシア研究の有効なアプローチの一つになりえよう。

（付記）本稿はロシア・東欧学会 2004 年度大会での報告を加筆・修正したものである。座長の川端香男里先生、討論者の鈴木淳一先生、そしてレフェリーの先生方に深く感謝いたします。

（本論文は複数レフェリーの審査を経て編集委員会が採択したものである。）

参 考 文 献

- 大西克禮『幽玄とあはれ』岩波書店、1939。
 大野晋編著『源氏物語のもののあはれ』角川書店、2001。
 熊谷義隆「末摘花・蓬生巻の廃園——末摘花と自然描写——」『山形女子短期大学紀要』第 21 集、1989。
 鈴木日出男『源氏物語虚構論』東京大学出版会、2003。
 タチアーナ・ソコロワ＝デリュシナ、法木綾子訳『タチアーナの源氏日記 紫式部と過ごした歳月』TBS ブリタニカ、1996。
 田村充正「ロシア語訳『源氏物語』——立ち現れる〈声〉たち——」河添房江、小林正明、神田龍身、深沢徹、小嶋菜温子、吉井美弥子編『叢書 想像する平安文学 第四巻 交渉することば』勉誠出版、1999。
 土田久美子「ロシア語訳『源氏物語』をめぐる——〈語り〉と和歌の部分の翻訳を中心に——」日本比較文学会東京支部編・発行『日本比較文学会東京支部研究報告』No. 1, 2004。
 中村幸彦、岡見正雄、阪倉篤義編『角川古語大辞典』角川書店、第一巻、1982 & 第五巻、1999。
 西下経一『平安朝文学』塙書房、1950。
 紫式部作、藤井紫影、佐々醒雪、沼浪瓊音、笹川臨風校注・訳『新釋源氏物語』巻之 1 新潮社、1911。
 紫式部作、山岸徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語』全五巻、岩波書店、1958-1963。
 本居宣長『本居宣長全集』第四巻、筑摩書房、1969。
 柳沼重剛編『ギリシア・ローマ名言集』岩波書店、2003。
 和辻哲郎『和辻哲郎全集』第四巻、岩波書店、1962。
 Под общ. ред. Беляева, А.А., Новиковой, Л.И., Толстых, В.И., Эстетика: Словарь, М., Политиздат, 1989。
 Под ред. Евгеньевой, А.П., Словарь синонимов русского языка, Т.2, М., ООО «Издательство Астрель», ООО «Издательство АСТ», 2001。
 Институт русского языка, Словарь современного русского литературного языка, М.-Л., Наука, 1959 (Т.8), 1965 (Т.17)。
 Под ред. Конрада, Н.И., Японская литература в образцах и очерках, Т.1, Л., Издание Института живых восточных языков имени А.С. Енукидзе, 1927。
 Пер. с. яп. Марковой, В.Н., Волшебные повести, М., Государственное издательство Художественной литературы, 1962。
 Мокроусов, Алексей, «Алхимия слова», «Новое время», 7 Октября 2001, http://www.newtimes.ru/artical.asp?n=2917&art_id=1589 (2004/09/09)。
 Мурасаки Сикибу, Пер.с. яп. Соколовой-Делюсиной, Т.Л., Повесть о Гэндзи (Гэндзи Моногатари), В 4-книгах, Приложение, М., Наука, 1991-1993。
 Lady Murasaki, Trans. by Waley, Arther, *The Tale of Genji*, London: George Allen & Unwin Ltd., 1965。
 Morris, Ivan, *The World of the Shining Prince*, London: Oxford University Press, 1964. 斎藤和明訳『光源氏の世界』筑摩書房、1969。
 Murasaki Shikibu, Trans. by Seidensticker, E.G., *The Tale of Genji*, New York: Alfred A. Knopf, 1977。

⁽⁶⁰⁾ Там же.

Murasaki Shikibu, Trans. by Suematsu, Kencho, *The Tale of Genji*, Boston, Rutland, Vermont, Tokyo: Tuttle Publishing, 2001.

Murasaki Shikibu, Trans. by Tyler, Royall, *The Tale of Genji*, New York: Viking, 2001.

Seidensticker, E.G., *Genji Days*, Tokyo: Kodansya International Ltd., 1977.